

## 論文の内容の要旨

論文題目     インドにおける曼荼羅の成立と発展

氏     名     田     中     公     明

平安時代の初めに伝教大師最澄、弘法大師空海によって我国に伝えられた曼荼羅は、日本の仏教図像の根本として尊重されただけでなく、その文化全般にも大きな影響を与えてきた。日本における曼荼羅研究は、両界曼荼羅の伝来より、1200年の歴史を有している。とくに平安中期から鎌倉初期にかけては、事相・図像の研究が高揚し、両界・別尊曼荼羅について多数の文献が撰述された。その後、鎌倉・室町・江戸と時代が下がり、密教への社会的需要が減退すると、曼荼羅の研究も停滞するが、明治に入ると、西洋の科学的方法を導入し、批判的な仏教研究がはじまった。

そして日本伝来の曼荼羅については、1960年代から70年代にかけて、優れた研究が陸続として発表された。とくに石田尚豊博士の『曼荼羅の研究』（東京美術、1975年）は、日本の曼荼羅研究史上、最も重要な著作とあってよい。同著によって日本伝来の両界曼荼羅の研究は、大きな峠を越えたといっても過言ではない。

これに対して本論文は、石田博士が視野に含めなかった仏教の故国インドに目を向け、同地で5～6世紀頃に曼荼羅の原形が現れてから、仏教が衰亡する直前に成立した『時輪タントラ』（10世紀末～11世紀前半）に至るまでの、曼荼羅の成立と発展の歴史を解明することを目的としている。

その構成は、曼荼羅の成立と歴史的発展を解明する第1部「研究篇」と、筆者がサンسكريット原典を発見した重要文献の解題とローマ字化テキストを収録した第2部「文献篇」からなっている。

このうち「研究篇」第1章「曼荼羅の成立」では、古代から礼拝像に見られた三尊形式が、曼荼羅の原初形態へと発展し、鳥瞰的な風景描写を伴った礼拝用の仏画（パタ）から、幾何学的なパターンをもった曼荼羅が出現するまでのプロセスを解明する。初期の曼荼羅

は釈迦・観音(蓮華手)・金剛手の三尊形式から発展した単純な三部構成であった。そこには後世の曼荼羅を特徴づける幾何学的パターンはなく、諸尊の集会する楼閣や道場を鳥瞰的に描いた叙景曼荼羅であった。しかし初期密教經典の『宝楼閣經』では、すでに礼拝用仏画と曼荼羅の分化が始まっている。

これに対して『文殊師利根本儀軌經』では、叙景曼荼羅のような内院に、ヒンドゥーの神々を配した三重の外院が巡らされ、幾何学的な曼荼羅への一歩が踏み出された。そして『大日經』所説の胎藏曼荼羅は、三尊形式から発展した三部立ての曼荼羅が、さまざまな試行錯誤を経てたどり着いた最終的到達点である。第2章「胎藏曼荼羅の成立」では、複雑な構造をもつ胎藏曼荼羅が、原始的な叙景曼荼羅から、どのように発展してきたかを解明する。胎藏曼荼羅では、上部(東)に仏部、向かって左(北)に蓮華部、右(南)に金剛部の尊格を配した内院の周囲に、釈迦如来とその教化を受けたヒンドゥーの神々を描く第二重、文殊を中心にブッダの教説を聴聞する対告衆の菩薩たちを集めた第三重が巡らされた。これら三部の諸尊を、画面上部と左右に配する三部立ての曼荼羅は基本的には左右対称であったが、画面下部には本来、ヒンドゥーの神々を描いていたので、上下左右完全対称の画面を構成するには無理があった。

これに対して金剛界曼荼羅は、従来にない五元論の体系を導入した新しい曼荼羅の革命の出発点ともいうべきものであった。しかしこの画期的なシステムは、一日にして成ったものではない。第3章「『理趣經』の曼荼羅」では、金剛界曼荼羅の五元論の源流となった『理趣經』の曼荼羅を概観する。『理趣經』と『初会金剛頂經』の成立の先後については従来から議論があったが、本論文では文献・図像の両面から、『理趣經』が『初会金剛頂經』に先行し、『理趣經』系の発展によって金剛界曼荼羅が成立したことを論じている。『理趣經』の曼荼羅は、經典所説の教理命題を尊格化するという画期的な特徴をもっていた。その初段は17、それ以後の各段は4あるいは5の教理命題から構成されていたため、上下左右完全対称の曼荼羅が容易に構成できた。しかし『理趣經』の発展形態である『理趣広經』でも、その構成は、仏部・蓮華部・金剛部の三部に宝(摩尼)部を加えた四部が基本で、羯磨部を加えた五部立ての曼荼羅の完成は金剛界曼荼羅を待たねばならなかった。

そして第4章「金剛界曼荼羅の成立」では、五元論を特徴とする金剛界曼荼羅を取り上げる。金剛界曼荼羅は、諸尊を如来・金剛・宝・蓮華・羯磨の五部に分類し、五部の諸尊を中央と東南西北に均等に配することにより、上下左右完全対称の曼荼羅を作り上げた。またこの五部は、相互に包摂しあうことにより二十五部・百部・無量部へと展開する。この互相渉入思想により、『初会金剛頂經』は、これまでの密教で膨大な数に達していた尊格・印・真言陀羅尼・三昧耶形などを、体系的に分類整理することに成功した。なお金剛界曼荼羅を説く『金剛頂經』は真言八祖の一人、龍猛(ナーガールジュナ)が南天鉄塔で感得したものとされる。同章[12]では、謎に包まれていた金剛界曼荼羅成立のプロセスを明らかにするとともに、大村西崖・梅尾祥雲の論争以来の懸案となっていた南天鉄塔の謎を解明する。

その後インドでは、『金剛頂經』系の密教がさらに発展して後期密教の時代に入る。第5章「『秘密集会』曼荼羅の成立」では、後期密教の曼荼羅理論を確立した『秘密集会タントラ』とその曼荼羅を、聖者流・ジュニャーナパーダ流の二大解釈学派を中心に考察する。『秘密集会』は、基本的に『金剛頂經』系の五部を基本としながら、曼荼羅の諸尊に、

五蘊・四大・十二処を配当する「蘊・界・処」説を導入した。これによって限られた尊数で、世界のすべてを象徴する曼荼羅理論が成立したのである。そしてインドでは9世紀以後、『秘密集会』系の密教が発展し、無上瑜伽父タントラと呼ばれる一連の聖典群が成立する。

いっぽうインドでは、これとあい前後して、無上瑜伽母タントラと呼ばれる聖典群が出現し、父タントラ以上に隆盛を極めることになる。第6章「母タントラの曼荼羅」では、従来謎に包まれていた母タントラの起源を、チベット訳のみ現存する最古の母タントラ『サマーヨーガ・タントラ』にまでたどり、その曼荼羅の発展過程を考察する。『サマーヨーガ』は『理趣広経』から発展したが、母タントラのより発展した体系である『ヘーヴァジュラ』『サンヴァラ』には、『秘密集会』系の「蘊・界・処」説が取り入れられた。また『サンヴァラ』系は、曼荼羅の諸尊に三十七菩提分法を配当する解釈に特徴がある。

さらにインドでは10世紀から11世紀にかけて、父母両タントラを統合する気運が興り、その成果は、インド最後の仏教体系『時輪タントラ』に結実する。第7章「『時輪タントラ』の曼荼羅」では、『時輪タントラ』が、父母両タントラの曼荼羅をどのように統合し、空前絶後の一大密教体系を構築したのかを紹介する。このように『時輪タントラ』は、インドで歴史的に最後に現れた仏教聖典であるだけでなく、1700年に亙るインド仏教発展の総決算の地位にあった。そしてその体系を図示したものこそ、身口意具足時輪曼荼羅に他ならない。『時輪』は、『秘密集会』系の「蘊・界・処」説に業根とそ働きを加えることにより、我々の経験する世界のすべてを象徴するシステムを作り上げた。それはまた、我々の経験する世界の根底にある主客の二元対立が、究極的には虚妄であることを示すものでもあった。

そして「研究篇」の末尾には、終章「インドにおける曼荼羅の展開とその思想的意義」を置いた。その前半では、インド後期密教時代に成立した『ヴァジュラーヴァリー』と「ミトラ百種」曼荼羅集を中心に、曼荼羅の歴史的展開が、最終的にどのような種類と形態の曼荼羅を生み出したかを考察する。さらに終章の後半では、曼荼羅の思想的解釈を考察する。この中で筆者がとくに重視したのは、『秘密集会』系で発生し、母タントラから『時輪』にまで継承された「蘊・界・処」説である。そして最後に、インド密教が、この「蘊・界・処」説を用いて、限られた尊数で世界のすべてを象徴する曼荼羅理論をどのように構築したかを紹介した。

このように曼荼羅は、当初は礼拝像の一形式に過ぎなかったが、尊格に教理を当てはめることで思想との結びつきを強め、ついには仏教の思想を表現する一大宗教芸術となった。インド仏教1700年の歴史の最後を飾る密教の600年は、曼荼羅発展の歴史でもあったといえるのである。

本論文では、サンスクリット校訂テキストが刊行されている密教文献は、これを引用・参照したが、『秘密集会』聖者流の『秘密集会曼荼羅儀軌二十』と、ジュニャーナパーダ流の『普賢成就法』は、曼荼羅の歴史的発展を論じる上で、きわめて重要であるにもかかわらず、いままでサンスクリット写本が発見されていなかった。そこで本論文「文献篇」には、筆者がネパール留学中に発見した『秘密集会曼荼羅儀軌二十』と著者不明の『普賢成就法』のサンスクリット註の写本の解題とローマ字化テキストを収録した。また『普賢成就法』註については、和訳も収録した。本論文「研究篇」とあわせて参照されたい。